

編集後記

ずいぶんアナーキーな研究会ではあった。「文学における近代」というテーマも、もともと自由な報告を誘発するために、もうけられている。これなら、あまりしばられずに、なんでもしゃべれる。そう参加者にも思ってもらえると、考えたわけである。

にもかかわらず、参加者の話題は、しばしばそのゆるやかな枠組からも逸脱した。中世に焦点をしぼるもの、美術、茶道、音楽、芸能を語るもの、はては新婚旅行のありようまで、討議の対象となった。まことに、開放的なあつまりであったと思う。

この破天荒ぶりは、班長の寛大な人柄によっている。幹事のルーズさにも、なにほどの責任はあるかもしれないが。

刺激的な交流がたもてたことは、多とすべきであろう。しかし、全体としてまとまりある研究報告をだすという点になると、考えさせられる。じつさい、あつまってきた論文の拡散ぶりには、ややたじろいだ。まあ、個々のかがやきにかけてということ、御容赦をいただきたい。

論文集の構成については、それでもいちおうのまとまりをつけた。近代文学の諸相を正面から追求したのがⅠ。Ⅱは、翻訳、翻案、異文化比較に興味をよせている。Ⅲへは、社会史めいた関心の強いものをあつめた。しかし、率直に言って、「その他」という印象のただようことは、いえない。あるいは、そもそも全体が「その他」だと言すべきか。

ひとつひとつのできばえをこそ評価してほしいと、くりかえしのべそえておくしだいである。

井上章一